

# 「虫めづる姫君」論

今 村 みゑ子

基礎教育課程

A Study of *Mushi Mezuru Himegimi*

IMAMURA Mieko

*Division of Liberal Arts and Science*

(Received November 7, 2008 ; Accepted January 10, 2009)

## はじめに

「虫めづる姫君」は、古典には珍しい短編集『堤中納言物語』の中の一編である。王朝の姫君のありようとは異なった、変わり者の姫君を主人公とする。まず「虫」、それも特に「毛虫」を好むという、その愛好が際立って変わっていることは言うまでもない。そして、身だしなみ・しぐさのすべてにおいて、徹頭徹尾変わっている。その発想・着想は前代未聞である。しかしながら、この作品をただ、その変わり者ぶりが面白い、というだけで済ますわけにはいかないようである。実に知的に設定され、構成されている。この作品をどう理解するかは、姫君の人物像をどうとらえるか、にかかっている。

この「変わり者」というところを諸氏は次のように述べている。

- この姫君は、異常・変態の性格の所有者であった。実は萎黄病らしいのである。(山岸徳平『堤中納言物語評解』有精堂出版、1954年)
- 姫君を批判するとか、姫君を通して社会を風刺するというような意図もなく、ただ一風変わった姫君を活写していることが、この物語の生命であると思う。(三角洋一『堤中納言物語 全訳注』講談社、講談社学術文庫、1981年)
- 姫君の生活姿勢を、世俗の慣行という圧力に反抗して自我の主張を貫徹しようとする、抵抗精神の発露といった観点から評価する風潮がある。けれども、作品の趣旨ではあるまい。姫君の生態は、化粧の排除もそうだが、王朝貴族の美学を基準とすれば、怪奇醜悪で嫌悪すべき存在であった。そうした醜悪の美学が、伝統の、優美の美学に措定されたということなのである。世紀末的な露悪思想と獵奇趣味とを反映する、頹廢精神の産物といえよう。(塚原鉄雄『堤中納言物語』新潮社、新潮日本古典集成、1983

年)

- 理屈をならべ平安貴族の姫君とは似ても似つかぬ異質な姫君の言動を描く。(稲賀敬二『日本古典文学大辞典』岩波書店、1984年)
  - 非常に理知的、科学的な言動と、それとは全く裏腹な性格描写が繰り返され、読者を翻弄する「楽しさ」を持つ。姫君の言葉は、論理にかなうに似てどこか理屈倒れしており、思索と言動との間にアンバランスなもの、相通わぬものが存在する。(大槻修『堤中納言物語 とりかへばや物語』岩波書店、新日本古典文学大系、1992年)
  - “虫めづる姫君”とはスケープ・ゴート、仏教的言説によって抑圧された精神が解放を求めて自ずから生み出した道化にほかならない。なぜなら彼女こそが仏教的言説を模倣し笑われ批評されることで“世界”を打ち壊しにしようからだ。物語が姫君の批評に用いる日常的規範は姫君の異常さを際立たせる道具として利用されたにすぎない。日常的規範をも体制的な仏教的言説をも異化するその身振りは、いかにも〈道化〉にふさわしいことだろう。(竹村信治『「虫めづる姫君」考』『国文学攷』153号、1997年3月)
  - 読者の印象に残るのは、そこだけで完結している自閉的な小宇宙の存在であり、自分が属しているのはそれとは違う、健全な常識が支配しているこちら側の世界であるという感覚であろう。(土方洋一『鶴林紫苑』風間書房、2003年)
- これら多くの姫君像の解釈は、病気、怪奇醜悪な頹廢精神の産物、思索と言動のアンバランス、道化、健全な常識に対置する自閉的な小宇宙、といったネガティブなものである。一方、そうした見方に否定的な次のような見解もある。
- 姫君に伝統的習俗への反逆を科学的・理論的に主張

させ、しかもその姫君を戯画的にえがくところに、短篇物語としての作者の鋭い批判と諷刺を見る。その批判・諷刺はむしろ健康であり近代的であって、単に姫君の異端的な言動ゆえにこれを頹廢的と見るのは当たらないであろう。(寺本直彦『落窪物語 堤中納言物語』岩波書店、日本古典文学大系、1957年)

多くのネガティブな姫君像を前にして、あらためてこの作品を読み直し、姫君像を問い直す意味があるのではないかと考える。この作品が面白いのは、この姫君の存在感の強さであり、常識と対峙する価値観と信念の強さであろう。無論、笑いながら読んでよいのだが、姫君は単なる笑いの対象ではないと思う。

そのことと関連するのだが、この作品は姫君の物言い等をどのように現代語訳するのが、取り分け難しい作品であると思われる。それは言葉の意味の置き換えでは訳せないところがあること、訳しようによっては真の意味が見えてこなくなることであり、現代語訳は、当然、姫君の人物像および物語の真意をどのように理解するのか、という点に関わるものである。

結論的に言えば、私論は姫君には一貫した論理主張があり、それは「物の本当の姿を知ってこそ心が深い」というものである。そして、「本当の姿」とは、「変化する」ということである。事物・事象は「変化する」という見方が姫君の根本にある。このことは指摘されていない。しかし、その点を看過したことが姫君の造型をネガティブなものとしてきた要因ではないかと思われる。

姫君の主張には、事物・事象は「変化する」という見方が根底にあり、それゆえに虫をその変態の相でとらえ、姿は変わる、だが、そのどれもが同じ命、命の等価性、という認識につながる。姫君は「毛虫が好き」と言っているが、「蝶が嫌い」とは言っていない。次にそれは命の輪廻転生でも同じことで、人間道・畜生道では姿が変わる、しかしそのどれもが同じ命、命の等価性という認識につながる。さらにそれは、世の中と人の価値観についての見方でも同じことで、人はいつまでも生きながらえることはできない、だから世の中も変わり、価値観も変わる、という認識になる。「理屈」でもなければ、矛盾でもない。作者は、姫君を、常識を逸脱した笑われ者、として描いているのではなく、表層的のものを、常識にとらわれている世間との価値観の対峙を、姫君を通じて示しているものと見る。

もう一つ看過できないのは姫君を見た右馬の佐<sup>うま すけ</sup>の印象である。ここは今までほとんど問題にされてこなかった。しかし、ここには非常に重要な意味が隠されている。単に姫君は生来美しい女性であったことが明かされ、それ

にしても変わり者であることが惜しい、ということではない。右馬の佐の印象はさらに、惜しいのに「気高い」ところが普通とは異なっている、というアンビバレントなものである。その理由を読み解くと、姫君の人物像も明らかになるはずである。

姫君の人物像を明らかにするためには、姫君の主張や右馬の佐が抱いた印象等を検証していかなくてはならない。以下本論における引用本文のテキストには新日本古典文学大系『堤中納言物語 とりかへばや物語』を用いる(ただし仮名遣いについては校注者が傍記した歴史的仮名遣いを用いた)。また、現代語訳および解釈等の参照として次の諸書を用いる。刊行順に丸付き数字を付し、参照に際してはその数字を示す。①山岸徳平『堤中納言物語評解』(有精堂出版、1954年)、②日本古典文学大系『落窪物語 堤中納言物語』(寺本直彦校注、岩波書店、1957年)、③松尾聰『堤中納言物語全釈』(笠間書院、1971年)、④土岐武治『堤中納言物語の注釈的研究』(風間書房、1976年)、⑤講談社学術文庫『堤中納言物語』(三角洋一全訳注、講談社、1981年)、⑥新潮日本古典集成『堤中納言物語』(塚原鉄雄校注、新潮社、1983年)、⑦日本の文学『堤中納言物語』(大槻修校注、ほるぷ出版、1986年)、⑧新日本古典文学大系『堤中納言物語 とりかへばや物語』(引用本文のテキストとしたもの。大槻修校注、岩波書店、1992年)、⑨新編日本古典文学全集『落窪物語 堤中納言物語』(稲賀敬二校注、小学館、2000年)。

## 一 姫君の主張

さて、姫君の主張を確認しよう。

主張、その一。

「人々の、花、蝶やとめづるこそ、はかなくあやしけれ。人はまことあり、本地たづねたるこそ、心ばへをかしけれ」とて、よろづの虫の、おそろしげなるをとりあつめて、「これがならむさまをみむ」とて、さまざまなるこばこどもに入れさせ給。

「人はまことあり」は解釈が分かれている。①・②・③・⑥・⑦・⑧・⑨は「誠実な心」、⑤は「まじめな気持ち」、④は「真実を求める心」とする。意味的にはさほど離れていないが、ここはものの見方について述べているので、「誠実な心」ではしっかりこない。誠実・まじめ、の意は、それ故に「ものの見方」としては④の「真実を求める心」とするのがふさわしいと思う。また、この科学的な主張に、「本地」という仏教語を用いているが、当時、それに当たる語もないとすれば、すべてが「本体・実体」と解釈していることで納得される。

ここで姫君は、「世間は花よ蝶よと、見た目の美を重

んじているが、それは浅はかである、人間には真実を重んじる心があるのだから、ものの本当の姿を追究することこそ心が深い（考えが深い）」と主張する。世間の価値観と姫君の重んじる価値観をきっぱりと対立させている。しかし、姫君はけっして独りよがりの、根拠のない主張をしているのではなく、「人はまことあり。本地たづねたるこそ、心ばへをかしけれ」と、人間の普遍的な「真理を追究する」という営みを根拠として述べている。これが親たちが姫君を常識的な立場から説得しようとしてもできない理由である。

さて、ではその「本地たづねたる」、すなわち、「物の本当の姿を追究する」とは何か、それは、姫君の言う「これがならむさまをみむ」、すなわち、「これらの虫が成長し、変化する様子を見る」ということなのである。これはいわゆる虫の変態についての認識で、卵→幼虫→さなぎ→成虫という一連の姿をもって、虫の実体ととらえる見方である。つまり、姫君は物の実体を、ある特定の形においてではなく、変化するもの、と見ているのであり、ここが重要なポイントである。

主張、その二。

（親たち）「人は、みめをかしき事をこそこのむなれ。むくつけげなるかは虫を興ずなると、世の人の聞かむも、いとあやし」と聞こへければ、「くるしからず。よろづの事どもをたづねて、末をみればこそ、ことゆへあれ。いとをさなきことなり。かは虫の蝶とはなるなり」そのさまのなりいづるを、とりいでてみせ給へり。

親は「世間は見た目を重んじるものだ」と言いかけ、世間体を重んじるべきことを説教する。親は娘の変わり者ぶりが娘の不幸になると思えばこそ言い聞かせるのであり、今日にもよく通じる親心、親の意見である。しかし、姫君の考えはそうした世間の通念と鋭く対立するものである。姫君は「すべて物事はその根本を追究してこそ、結論が出て納得がいくもの。そんなこと初歩的な道理だと思う。毛虫が蝶になる」、そう言って、蝶が羽化しかかっているのを取り出して両親に見せるのである。根本を究めて結論が出る、という、今日の科学的、合理的な見方とも言える考えであり、かつ、これも「主張、その一」と同じく、変化する一連の過程に真理があるとする認識である。そのうえに、実物を見せるという実証主義をも伴っている。

主張、その三。

姫君のうわさに興味をもった右馬の佐が造り物の蛇を贈ってきた。その蛇が袋から頭をもたげ、侍女たちが恐怖と驚きで騒いだ折のことである。

君はいとのどこかにて「なもあみだ仏、なもあみだ

仏」とて、「生前の親ならむ。なさわぎそ」とうちわなゝかし。「かろし、かやうになまめかしきうちしも、けちえんに思はむぞ。あやしき心なりや」と、うちつぶやきて、ちかくひきよせ給も、さすがにおそろしくおぼえ給ければ、

まず、姫君は蛇を「生前の親かもしれない」と言う。これは仏教の輪廻転生の思想で、当時は、少なくとも観念の上では、それを真理ととらえていた。であるから、姫君が蛇を前世、親であったかもしれない、という見方自体はおかしなことではない。こうした前世譚は説話などにも散見する。蛇は六道輪廻の「畜生道」に当たり、苦しい命の姿である。六道を脱するためには、阿弥陀仏のいる極楽に往生しなくてはならないから、姫君は「なもあみだ仏」と念仏を唱えてやるのである。六道輪廻は地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天人の道を輪廻することである。これは一つの同じ命、等価である命が姿を変えて転生する思想であるから、いわば「主張、その一」「主張、その二」の、虫の変態に相当する。それらが科学的な領域での見方であるなら、これは人間の命に関する仏教的な見方におけるもので、同じ命を見るのか、目の前の姿を見るのか、という命題において同じ主張である。

ところで、「かろし、かやうになまめかしきうちしも、けちえんに思はむぞ。あやしき心なりや」の部分はテキスト自体に揺れがあり、したがって解釈も揺れている。それぞれの採用したテキストと解釈は次のとおりである。

①顔、ほか様に、「なまめかしきうちしも、けちえんに思はむぞ。怪しき心なるや」

解釈 顔は横の方に向けて「(この蛇も) まだ、若々しくて美しい間だけでも、(私は自分の)、血すじを引く親族として考えようと思うぞ。(然るに、女房たちは、逃げ惑うて、蛇を相手にもしないのは、) 見苦しい心である事よ。(大切にしてい、相手にすべきである。)」

②顔、ほかやうに、「なまめかしきうちしも、けちえんに思はむぞ。あやしき心なるや」

解釈 顔をそむけて、「(この虫の) なまめかしい中にも(蛇が私を) 血縁の者に思うのが、不思議な心ですよ」

③かほほかやうに、なまめかしきうちしも、「けちえんに思はむぞ。あやしき心なりや」

解釈 顔をそっぽへ向けて、(その姫君の様子がいつもになく) 優雅なうちにさえも、「(私はこの蛇を) 血のつながったものと思ひましようよ。(それをこわがるなんてお前たちは) けしからぬ心だこと」



- ④かほゝかやうに、「なまめかしきうちしも、けちえんにおもはんぞ。あやしき心なるや」

解釈 顔をそむけて、「虫のまだ若々しい心の中にも、自分たちを血縁の者と思ってゐるのでせうよ、それなのに何といふ心掛けなのです」

- ⑤「かろし。かやうになまめかしきうちしも、けちえんに思はむぞ、あやしき心なりや」

解釈 「罪が軽かったのね。このように美しい姿でいるというのに、びっくりするとはいけない者たちね」

- ⑥顔、ほかやうに、「なまめかしきうちしも、掲焉に思はむぞ。あやしき心なるや」

解釈 顔、そっぽに、「優美な様子のをちを愛でるのは、あまりに露骨すぎる。不埒な考えなんだわ」

- ⑦「かろし。かやうになまめかしきうちしも、けちえんに思はむぞ、あやしき心なりや」

解釈 「罪が軽かったのだわ。このように美しい姿だというのに、また血のつながる親族でもあらうものを、お前たち、騒ぐとはよくない心ですよ」

- ⑨顔、ほかやうに、「なまめかしきうちしも、けちえんに思はむぞ。あやしき心なりや」

解釈 顔はそっぽに向けて、「優美な姿の間だけは、著しくかわいがるというのは、まことに不埒な考えだわ」

まず、本文を「かろし、かやうに」として「かろし」を「罪が軽かった」と解釈するのは無理であろう。蛇に生まれること、すなわち「畜生道」に生まれることは決して「罪が軽い」ことではないからである。この後に「さすがにおそろしくおぼえ給ければ」とあるので、こは「かほ、ほかやうに」とする本文の方が意味が通る。

また、「けちえん」を「血縁」とし「血縁の者と思う」と解釈するのは、その前に「生前の親ならむ」とはっきり言っているので、あえて「親族」と言い換える必要がない。それに「血縁」とする用例は『日本国語大辞典』でもこの文を例に挙げるのみで、古典にはほとんどない解釈であるようだ。「掲焉」と取るのが用例も多く意味も通り易い。例えば『増鏡』「おどろのした」に「平家の一族のみいよいよ時の花をかざしそへて、花やかなりし世なれば、(後鳥羽院は)掲焉にもてなされ給はず」とあるのは、後鳥羽院が「格別に」扱われることもなかった、という意味になる。ここも、「格別に」という意味ならば「思はむ」にも繋がるだろう。すなわち、稿者は⑥・⑨に近く、次のように解釈する。

顔はそむけて、「優美な姿の間だけ、格別に考え

るようなのは、おかしい考えだわ」

それは何を言っているのかと言うと、輪廻転生は姿も変わるので、「なまめかしきうち」すなわち、「見た目の優れた人間の姿のとき」だけを「格別に考える」のはおかしい、と言っているのである。虫であれ人であれ、命は等価であり、見た目ではない、ということであり、「主張、その一」「主張、その二」と同様な見方が、輪廻転生においても一貫していると考ええる。

なお、承久四年(1222)に成立した『閑居友』には、作成の依頼主である高貴な姫君を意識して釈迦の慈悲を説くくだりに、蛇・蚯蚓をも疎んじてはいけないとの文言がある。

かやうの <sup>くちなは</sup>蛇・蚯蚓までも、いたく疎しとはさし離たじよと覚ゆ。世々経たる父母、むつ事の仲らひにもあるらん。まして仏は、よろづの生きとし生ける物をば、みな等しく我子の如く、哀しみ、あはれみ給へば、彼らをうとうとしく思はば、仏の御心に遠ざかるかたもあるべし、など、さまざまに覚え侍き。

作者は摂政関白に至った九条良経の息子で、僧の慶政である。本話の主人公である姫君の考えは慶政の論しに等しいのであって、仏教的な思慮の深さを見ることができこそすれ、決して異常とは言えないのである。

主張、その四。

右馬の佐に、姿、それも虫取りに興じているところを見られて、侍女たちから責められた姫君の言い分である。

「思ひとけば、ものなむはづかしからぬ。人は夢まぼろしのやうなる世に、たれかとまりて、あしきことをもみ、よきをもみ思ふべき」

ここにはさしたる解釈の揺れはない。私に解釈すると、「悟ってしまえばこの世に恥ずかしいことなんて何もないんだわ。夢・幻のようにはかなく移り変わっていく世の中に、誰がいつまでも生きながらえて、これは良いだの、これは悪いだの、判断し続けることができるかしら。誰にもできっこないのだから」となる。

ここはいわゆる仏教における「無常観」の披露であるが、けっして詠嘆的な無常観によって言い訳をしているのではない。姫君の「主張、その一」「主張、その二」における虫の変態、「主張、その三」における輪廻転生と同様の、物事・事象の真理とは「変化すること」という一貫した見方が根底にある。すなわち、人は生き続けることができないので、世の中も変化し、これは良いとかこれは悪いとかという価値基準も変化する、という考えである。価値基準も変化するのであるから、今という一時の恥は恥ではない、と言うのである。

この主張によく似た見方を『宇治拾遺物語』と『徒然

草』に見出す（テキストは共に新日本古典文学大系による）。

『宇治拾遺物語』の最後を締め括る一九七話「盗跖与孔子問答事」は、孔子が悪人盗跖を教化しようとして失敗する話である。出典は『莊子』「盗跖」である。

孔子は「人の世にあるやうは、道理をもちて、身のかざりとし、心のおきてとする物也。天をいたゞき、地を踏みて、四方をかためとし、大やけにうやまひ奉り、下をあはれみ、人に情をいたすを事とする物なり。然に、うけ給はれば、心の欲しきまゝに、悪しき事のみ事とするは、当時は心になふやうなれども、終悪しき物也。されば猶、人はよきにしがふをよしとす。然ば、申にしたがひて、いますかるべき也」と言い聞かせる。すなわち、「人が世の中にあるべきすがたは、道理を身につけ、心構えとするものです。天をいただき地を踏んで、国を守り、朝廷をうやまい、下のものをかわいがり、人に情けをもって接するべきです。それなのに聞くところによると、あなたは心の欲するままに悪いことばかりしているとか。それはそのときは自分の心になっているように思うかもしれませんが、最後は悪いことになります。ですから、人は良いとされることに従うのがよいのです。よって私の申すことに従いなさい」というものである。

それに対し、盗跖は、「汝がいふ事ども一もあたらず、すなわち、「おまえの言うことは一つも当たっていない」と言い、「そのゆへは」として、堯・舜は世に尊ばれた皇帝であるがその子孫は領地すらない、賢人伯夷・叔斉は首陽山に餓死した、お前の弟子である顔回はずばらしく教え育てたが不幸にも夭折した、もう一人の弟子子路は殺害された、と例を挙げ、「しかあれば、かしこき輩は、つるにかしこき事もなし。我、又悪しき事をこのめど、災、身にきたらず。ほめらるゝもの、四五日に過ず。そしらるゝもの、又、四五日に過ず。悪しき事もよき事も、ながくほめられ、ながくそしられず。しかれば、我このみにしたがひてふるまふべきなり」と述べる。すなわち、「優れた人が、最後にりっぱであることもない。私は悪いことを好んでいるが、災いが身にすることはない。ほめられるのも四、五日にすぎないし、非難されるのもまた四、五日にすぎない。悪いことも良いことも永くほめられたり、非難されたりはしない。だからわたしは自分の好みに従ってふるまうのだ」、との考えである。

常識的、良識的な道德規範を説く孔子の言葉の空疎さに対して、それを覆す例を挙げて反論する盗跖の言葉には説得力がある。『宇治拾遺物語』の編者は、孔子に対立する老莊思想の『莊子』を引いているのであるから、盗跖に軍配を上げているのである。特に、盗跖の、「良

いことも悪いことも永くほめられたり、非難されたりはしない、だから好みに従って振舞うのだ」という考えの、何と姫君の主張に似通うことであろうか。

また、『徒然草』第三八段は、

つらつら思へば、誉れを愛するは、人の聞きを喜ぶなり。褒むる人、譏る人、ともに世にとゞまらず、伝へ聞かむ人、又々すみやかに去るべし。誰をか恥ち、誰に知られんことをか願はむ。誉れは又譏りのもとなり。

というものである。「名誉を愛するのは、外聞を喜ぶのである。誉める人も非難する人も、ともに世の中につまでもとどまってははいない。たまたまそれを伝え聞いた人がいたとしても、その人もまたあつと言う間にこの世を去っていく。誰に対して恥ずかしいと思ひ、誰に知ってもらおうと望むのか。誉めるといふことは、裏を返せば非難のもとである」。

兼好のこの発言は姫君の「たれかとまりて、あしきことをもみ、よきをもみ思ふべき」に重なり、同時に「恥じる必要はない」という考えが、姫君の「ものなむはづかしからぬ」に重なる。兼好も『莊子』「盗跖」を念頭においたであろう。とすれば姫君の発言も、仏教的な無常観という以上に、「無為自然」を価値観の根底に置く老莊思想に近いものがある、と考えることができよう。

三者の共通性には必然性がある。盗跖は孔子の教化する儒教道德に反する、悪をなす人間であり、兼好は世間を捨てた出家である。虫めづる姫君は、一般の「見た目が大事」という通念に抗う。三者には、対世間・対通念という姿勢において共通していることにより、その考えにも共通性がある。

以上、姫君の主張が終始一貫したもの見方の上に成り立っていることを確認した。こうした主張は「論理にかなうに似てどこか理屈倒れしており、思索と言動との間にアンバランスなもの、相通わぬものが存在する」のではなく、「事物の本質は、変化する事象である」という、今日ならば、科学とも哲学とも言うべき、一貫した価値観に基づくものであることが確認される。作者は姫君の人物像をアンバランスなものとして造型してはいない。極めて注意深く一貫性あるものとして造型しているのである。

## 二 右馬の佐のアンビバレントな姫君の印象

前節で主張が一貫していることを確認したが、世間常識からすれば「変わり者」とされるその言動と身だしなみはどういうものか。

姫君は、当時の貴族の成人女子の身だしなみとして当然とされている「引き眉、齒黒め」を拒否して、「人は

すべて、つくろふところあるはわろし」と言っている。すなわち、引き眉、齒黒めのみならず「すべて」、姫君の言動・身だしなみのすべては、本当の自分を「つくろわない」こと、ありのままの自分でいること、という考えに基づいていると言える。それは「主張、その一」「人はまことあり、本地たづねたるこそ、心ばへをかしけれ」と同じ意味である。つくろわない、ありのままの自分が「まこと」であり、「本地」である。

そうしてみると、「変わり者」の最たる要素である「虫めづる」という言動も、毛虫を見守るための髪の毛の「耳はさみ」も、白楽天の詩を謡うのも、片仮名を書くことも、毛虫を見ようと「あらゝかに踏みていづ」（ばたばたと足音を立てて出てくる）ことも、「簾をおしはりて」毛虫を見ることが、「はたおりめ」（きりぎりす）の模様の小桂に白い袴を「このみて」着ていることも、「白き扇」に「墨黒に真名の手習したる」のも、上流貴族の女性にふさわしくないこれら一切の言動のすべてが、常識やたしなみの制約から自己を解き放って、ありのままにあり、言い換えれば、自らの意思で、好きなことを好きなようにすること、として行なわれていると見ることができるのであり、「りっぱそうな理屈と言動の不一致」といった指摘は当たらないと言えよう。「このみ」という言葉が用いられているが、それは前節に引用した『宇治拾遺物語』における盗跖の「悪しき事もよき事も、ながくほめられ、ながくそしられず。しかれば、我このみにしたがひてふるまふべきなり」に相当する。

さて、ここで考えるべきは右馬の佐が姫君を見たときの説明と感想である。二つある、一つはまず姫君の顔や姿を見たときの叙述である。

かしらへ衣着あげて、髪もさがりば清げにはあれど、けつりつくろはねばにや、しふげにみゆるを、眉いと黒く、はなばなとあざやかに、すゞしげにみえたり。口つきも愛敬づきて、清げなれど、齒黒めつけねば、いと世づかず。「化粧したらば、清げにはありぬべし。心うくもある哉」とおぼゆ。かくまでやつしたれど、みにくゝなどはあらで、いとさまことに、あざやかにけたかく、はれやかなるさまぞあたらしき。

右馬の佐の目撃を通じて、読者に初めて姫君の資質が明かされる。本来のままの姫君は実は顔も髪も美しいのである。引き眉でない眉は黒く、華やかにすっきりとして涼しげであるし、口元も愛らしくきれいである。しかし、齒黒めをしていないなど、世間的ではなく、右馬の佐の感想は「化粧したならきれいであらうに、残念だ」というものであり、さらに、「なりふりかまわないでいるけれど、醜くはなく、普通とは異なって、すっきりと

気高く（気品があり）、はればれしているところがあたらし（すばらしい）」というものである。

最後の「あたらし」は従来「惜しい」という意で解釈されてきた。①②③④「惜しい」、⑤⑦「もったいない」。⑥⑨「残念だ」。しかし、文の流れからすると、ここは「やつしたれど」の逆接の内容、「みにくゝはあらで」の順接の内容がくるべきである。「いとさまことに、あざやかにけたかく、はれやかなるさま」が「あたらし」、すなわち「すばらしい」と解釈するべきである。例えば、『源氏物語』『梅枝』に「姫君の御有様、盛りにとゝのひて、あたらしうつくしげなり」、すなわち、「姫君の御有様、今を盛りに整っており、すばらしく美しい様子である」とある。「あたらし」をもう一度「残念だ」に戻して解釈してしまうと、天性の美質に、さらに「いとさまことに、あざやかにけたかく、はれやかなるさま」という美質が姫君に加わっていることを読み落とすことになる。

そうした誤った解釈のせいもあり、右馬の佐の姫君に対する印象は正確に解釈されず、本来美しいのになりふりかまわぬところが残念だ、といった解釈に終わっていた。注目すべきは右馬の佐の感想（地の文も右馬の佐の目に寄り添ったもの）のアンビバレントな点である。「美しいのに世間的でないのが残念だ」では終わらず、「だが、普通とは異なって、気品があって晴れやかなところがすばらしい」という。このアンビバレントな印象こそ、この作品の核心であるのに、この秘密は従来の説では解かれていない。なぜ、姫君は本来の造作の美しさとは別に——それだけなら化粧をしたらもっとよくなる、という右馬の佐の感想で終わるのに——、「いとさまことに、あざやかにけたかく、はれやかなるさまぞあたらしき」という印象を与えるのであろうか。その理由は、世間的ではないからこそ、つまり、自分の好きなことに夢中になって、生き生きと生きているからこそ、加わったもう一つの美質なのである。「いとさまことに」、すなわち平凡な女性には絶対でない、気品や生き生きと華やいだ、すばらしい雰囲気が自ずから醸し出されているのである。

もう一つは右馬の佐が、姫君の毛虫取りを見てしまったときの印象である。

ただちよきほどに、髪も桂ばかりにて、いと多かり。すそもそがねば、ふさやかならねど、とゝのほりて中々うつくしげなり。「かくまであらぬも、世のつねび、ことざま、けはひもてつけぬるは、くちをしうやはある。まことに、うとましかるべきさまなれど、いと清げに、けたかう、わづらはしきけぞことなるべき。あな、くちをし。などか、むくつ



けき心なるらむ。かばかりなるさまを」と思ふ。

身長もほどよく、髪も多く筋も整って美しい、という天性の資質をまず認めている。そして、「これほど美しい女性でなくても、世間並みの行動や態度を身につけている女性なら、残念だと思われることもないのに。この姫はまったく疎ましい様子ではあるが、たいそう清らかで、気高くて、『わづらはしきけ（あなどれない雰囲気）』がなんとも普通とは異なっている。ああ、惜しいことだ。どうしてこんな気味悪い趣味をもっているのだろう。こんなにもすぐれた器量なのに」と思う。

ここでも右馬の佐の感想は先と同様にアンビバレントなものである。「疎ましい様子なのに清らかで気高くてあなどれない」、このアンビバレントな点が従来注目されなかったのは、「わづらはしきけぞことなるべき」の「わづらはしきけ」についての解釈の多くが誤っていることに一因がある。

①いとわしい状態、②（虫を好む）厄介な様子、③（虫などを好むという）こまった節、④毛虫など好んでいやらしい所がある、⑦毛虫好きという困ったところだけが、⑧虫好きという厄介な癖など、これらの解釈はわざわざ「虫を好む」といった言葉を補って、「わづらはしきけ」を否定的に解釈する。その解釈では「厄介な様子が普通と違う」という姫君の変わり者ぶりを見るのみであって、「ことなるべき」も否定的な見方になってしまう。それに対し、⑤気のおかれるところが、ただの女と違うのだろう、⑨気のおかれる点は、並みの女性とは違っている、という解釈がある。こちらが正しい解釈である。「わづらはしきけ」は「気のおかれるところ」、もっと言えば「侮れない雰囲気」という意味であり、「ことなるべき」はそれが普通の女性にはない優れた点なのである。つまり、ここでも、普通とは異なるからこそ、姫君は「いと清げに、けたかう、わづらはしきけぞことなるべき」だったのである。

しかし、作品中の右馬の佐はその理由に気付かない。変わっていて疎ましい様子「なのに」ではなく、「だから」こそ、「いと清げに、けたかう」という後天的に加わった美質があるのである。「けたかし」が印象の両方に出てくる表現であるのも、それが天性の造作ではなく、生きている存在感を表す言葉であることに注目される。右馬の佐が、姫君の美質がその生き方や価値観の現れとしてあることに気付くならば、あるいは好意に発展する可能性がないわけではない。しかし、「笑ひて」帰って行った右馬の佐はおそらく今後もそうと気付くことはないだろう、と読める。

右馬の佐が抱いたアンビバレントな印象は、しかし、作者が読者に示したかった核心であろう。世間の常識に

従って良しとするだけの生き方ではなく、自らの考えと信念をもち、通念から自分を解放して自らの意思で好きに振舞う、その徹底さにおいて、姫君は姫君の言う「はうぞく」すなわち「凡俗」を離れた、「気高さ」を備えているのであると言える。

### 三 鬼と女とは……

前一・二節において、姫君の主張と言動および身だしなみが一貫したものであるを見た。ここに一つ、どのように解するべきか、難しい姫君の発言がある。常識を説く両親に対して、持論を主張するところである。

さすがに、親たちにもさしむかひ給はず、「鬼と女とは人にみえぬぞよき」と案じ給へり。母屋の簾をすこし巻きあげて、几帳いでたてて、かくさかくいひだし給なりけり。

ここは、「そうは言っても、姫君は両親にも面と向かいなさらず、『鬼と女とは人に見えないのがよい』と考えて、簾を少し巻き上げ、几帳を隔てて、こんな風に賢く言うのです」とある。

諸説を見よう。

①「他人ならば勿論、直接対面する事はない。兄弟でも男は容易に対面はしない。然し、両親に対面しない事はないのであるが、この姫君は、他の女性とは、そのような点にも、異常な性格を持っているのであった」とし、「鬼と女とは」の発言に「鬼は人に恐れられ嫌われるから、人中出现すべきではない。女も他人に見知られる事は、忌み憚るべき事である」と注する。

②「そうは言うものの（風変わりではあるが、やはり女だから）親たちにも直接対面されず」とし、「鬼と女とは」の発言には「姫の警句か、俗諺か、未詳」と注する。

③「こうして親たちを困らせるような姫ではあるが、さすがに女だけあって」とし、「鬼と女とは」の発言には、「当時の俗諺か、姫の警句を諺風に表現したものか。……鬼と女を並べたのは奇抜のようであるが、実は、自然な発想といってもよいであろう」と注する。

④「そうはいうものの、やはり女だけに」とし、「鬼と女とは、人前に出ない方がいいものだとの意」とする。

⑤「姫君もお姫さまらしい恥じらいの心をもちあわせていた。それが人からにじみ出てくるものではなくて、諺をよりどころとしてのふるまいであるというのは、いかにもこの姫君らしい」とし、「鬼と女とは」の発言については「うとましく好きになれ

ない女と顔をあわせることを、『鬼にむかふ心地』と言った例が『うつほ』嵯峨院、『源氏』帚木、『あまのかるも』巻二に見える。この例も、そういう考え方にもとづいた諺であろう」と注する。

- ⑥「貴族女性は、原則として、親兄弟でも、几帳ごしに應對した。常識無視の姫君にも、女性らしさがある」とし、「鬼と女とは」には『宇津保物語』（嵯峨院）などに、うとましい女性と対座することを『鬼にむかふ心地』とする。見えない方がよいという意味であろうか。背景に諺が想定される。直接の対面を回避するものとして鬼と女が対比されたのであろう」と注する。
- ⑦「当時の俗諺か。また即座に発した姫君の警句か。いずれにしても、当時の道德觀念から出たもので、この姫君の普段の挙動と矛盾する」とする。その矛盾とは「後出には『あららかに踏み出づ。簾をおしはりて、枝を見はり給ふ』のだから、その行動と思考にはアンバランスな点が多々あろう」と説明する。
- ⑧「変態的かつ非社会性をもつ姫君だが、一方で常識的な一面も持っている。こうした言動の意外性に着目したい」とし、「鬼と女とは」の発言に、「当時の諺か姫君独自の警句か」と注する。
- ⑨「万事常識破りの方が、そこはやはりお姫様、ご両親にでも直接顔つき合せて応答などはなさらず、『鬼と女とは人前に出ないほうがいいんだわ』と独自の思慮をはたらかせていらっしゃる」と現代語訳をし、「鬼と女とは」については「姫君の警句。『いづこのさる女かあるべき。おいらかに鬼と向かひるたらめ』（源氏・帚木）のような句を念頭に置いた作者の皮肉な筆法」と注する。

以上をまとめると、両親と直接対面しないことについて、⑧は「常識的な一面」とし、それを「言動の意外性」ととる。②③④⑥⑨はそこにさすがに「女らしさ」や「女」であることを見、⑤は「恥じらい」の心と見つても、「人がらからではなく諺をよりどころとしているのがこの姫君らしい」とし、⑦は「当時の道德觀念」によるとり、それを「普段の挙動と矛盾する」ととる。これらは基本的にこの行為を当時の女性の常識や道德に則ったものと見ている。①のみは「当時でも両親に対面しないことはない」とし、そこに姫君の「異常性がある」とする。

鈴木淑子氏「物越し」<sup>1)</sup>によると、「親兄弟や夫婦以外では、男女が直接対面することはないから、男女の対面は基本的にこの〈物越し〉の対面となる」とあり、親とは直接対面してもよいようである。しかもここには「親

たち」とあり、父親だけでなく母親に対してもそうしているのであるから、①以外の、「女らしさ」や「常識的な一面」とする見方は該当しないだろう。

また、『鬼と女とは人にみえぬぞよき』と案じ給へり、これを「姫自身の警句か、俗諺か」と保留しておくことも非常に奇妙なことになる。なぜなら、姫君自身が考え出したことと俗諺に従うこととは、まったく意味が異なるからである。まず、俗諺と取ることはできないだろう。常識に抗う姫君が俗諺をやすやす受け入れるとは思えないからである。「案じ給へり」とあるように、これは姫君自身が考えた言葉であると見るべきである。姫君は「女は人に見られてはいけない」という当時の社会常識に対して、「それでは女は鬼と同じだ」と見なしたのであろう。鬼（オニ）は隠（オン）から来ているという説があり、実際、百鬼夜行のように、鬼が登場する時間は人と反転した時間であり、本来なら人間と顔を合わせないものである。だから、姫君は「人と顔を合わせない女は鬼と同じだ」と考えるのである。姫君の、女と鬼を同類と見なした「案（考え）」はすこぶるウィットに富んだものである。しかし、女を鬼と同類と見なして喜ばしいわけがない、同時にそこには女に課された制約への批判と、女であることへの痛恨が込められているのではないだろうか。

前節で挙げた姫君の言動・身だしなみは女らしくないもの、女には制約されたものである。白楽天の詩を謡うこと、片仮名を書くこと、白い袴を「このみて」着ていること、「白き扇」に「墨黒に真名の手習したる」ことなどは、当時、男の文化である。女には漢詩も真名も教養として求められなかったことは、「昔は女がお経を読むことも制された」という『かげろふ日記』や、「一という文字も書かないふりをした」という『紫式部日記』にも現れている。男の子たちに虫をとってこさせて興じていたのは、虫を恐れないのが男の子たちであるからだとしても、姫君には女であることよりも当時の「いわゆる男の」文化に興味をもつ志向がある。それを性の倒錯などとする必要はない。なぜならそれが男の文化であったこと自体が、姫君が抗う世間の通念であるからだ。姫君はただ、漢字や漢詩や片仮名（経典の訓読などに使われ、大福光寺本『方丈記』が片仮名で書かれているように、男性は片仮名で文章を書いた）や白い袴や白い扇を「好んだ」のである。それが姫君の「自然」であった。そして、この場面のように、姫君は主張する女である。主張する女は古典の物語では珍しい。

ここに女の生き方を嘆いた独白がある。紫式部は『源氏物語』「夕霧」において、自らを処してつつましく、言いたいことも抑えて、理想の女性と言われる紫の上の、



死期近い頃の感慨を次のように書く（稿者による現代語訳）。

女ほど、身の処し方が窮屈で、みじめなものはない。しみじみと感ずることも、面白い折のことも、わからないかのようにじっと心に閉じ込めているのだったら、いったい何によって生きている喜びを味わったり、常なき世の中の所在なさを慰めたりできようか。大よそ女がものの道理を知らず、取るに足りないものと見なされては、女を育てた親とてどんなに残念に思うことであろう。何ごとも心のうちに秘めて、まるで無言太子（稿者注・過去現在未来を知ったため十三年間無言を通し、生きながら埋められそうになったという）とか、小法師たちがつらい修行の例とする昔の喩え話のように、悪いこと、良いことの区別をわきまえながら黙ったままになってしまうのは、言いようもなく情けない。（心に思うことをどの程度表現して）程良い状態に身を保ったらよいのか、私にとっても難しいことだ。

これは、女に課せられた制約をそのとおりに受け止めて身を処し、それ故に女の生き難さを痛感した証言である。生きながら埋められそうになった「無言太子」が生き難い「女」であるならば、「無言」でなく、自ら「主張」し、信念を披露したい姫君は、鬼として、簾の後ろに隠れて主張するしかなかった。それが、「さすがに、親たちにもさしむかひ給はず、『鬼と女とは人にみえぬぞよき』と案じ給へり」の真意ではないだろうか。①が言う「そこに姫君の異常性がある」のではなく、「姫君の、女であることへの痛恨の思いがある」と言いたい。

それは、好きに振舞った姫君であるが、一つだけ、世間の基準に従って、女は人（男）に見られてはいけないという行動を取るところに現れている。右馬の佐に見られていると知ったとき、

たちはしり、かは虫を袖に拾ひいれて、はしり入給ぬ。

であった。走り逃げるときでも毛虫を拾い上げるところは姫君の真骨頂であるが、姿を見られるのを憚るところはやはり、当時の慣習に従ったと見るべきであろう。であるから、姫君は女に課せられた制約の理不尽さを、鬼と同類だ、と見なすことに想到し得たのであろう。

馬場あき子氏は『鬼の研究』<sup>2)</sup>で、この部分を次のように論じている。

このことばに二重の警句性を感じると述べたのは、一つには価値観の変革を自問する〈虫めづる〉姫君が、さすがに「人に見えぬ」という女の掟を破り得なかったところに、〈羞恥〉の伝統の堅牢さを見る思いがするからであり、さらには、良俗に反して生

きるという、背水の地に立つ姫君の防衛本能が、無名の鬼として生きるものの韜晦本能と重なるからで、女と鬼との反世間的抵抗は二重うつしとなって、その生きがたさを頷き合っているのである。

姫君は右馬の佐に見られたとなると、あわてて奥に走り込んだ。これだけは姫君も平気ではなかったのであるから、馬場氏の言う『人に見えぬ』という女の掟を破り得なかったところに、〈羞恥〉の伝統の堅牢さを見る」とすることは頷ける。姫君は世間的価値観に反しても、生き生きと好むところを貫いていた。しかし、主張する姫君はそのとき親に姿を見せない。それは馬場氏の「背水の地に立つ姫君の防衛本能が、無名の鬼として生きるものの韜晦本能と重なるから」であり、稿者の『無言』でなく、自ら『主張』し、信念を披露したい姫君は、鬼として、簾の後ろに隠れて主張するしかなかった」との見解に重なると思う。「鬼と女とは……」という発言は、「女と鬼との反世間的抵抗は二重うつしとなって、その生きがたさを頷き合っている」という、姫君のけっして明るだけではない、「生きがたさ」を忍び込ませた発言だったのではないだろうか。紫の上の発言と言い、馬場氏の見解と言い、これらを参考にすると、この言葉は、女に課せられた制約の理不尽さを突いているのではないかと思われる。

最後に作者像について触れてみたい。馬場氏は、次のように述べている。

世の良俗美習に随順することを拒んだ美意識、反世間的、反道徳の世界に憎まれつつ育つ美の概念、少なくとも「虫めづる姫君」の一篇はそういう心によって描かれた短篇といえる。ささやかな官職を何くわぬ顔で奉じている一人の男が、ある夜ひめやかに、「鬼と女とは人に見えぬぞよき」と案じつつ、静かに執筆の筆をおろしている姿を思い浮かべるのは、まことに愉快である。こうした男こそ、かくれ鬼のひとりであり、人に見えぬを良俗とする女の物づつみにことよせて、危い反日常思想の一端をほめかせつつほほえんでいる姿がかいまみられる。中国では、世をしのぶ隠士の通称を〈鬼谷〉という。「虫めづる姫君」をものした隠士鬼谷先生も、この反世間的日常をいなく姫君とともに、世の醇風美俗の破りがたさにシニカルな微苦笑を禁じ得なかったことであろう。

馬場氏の言うように、作者は男で、それ故、自分のような価値観をもった姫君を造型できたのかも知れない。極めて知的で計算された論理性、またそれを姫君の描写に多分に誇張し、戯画的に表現する作者は、当の女性よりは、距離を置いて客観的立場で思考できる男性のなせ

る業であったように思われる。女性である紫式部は、先に見たように紫の上に嘆かせることでしか抵抗し得なかったのであるから。また、反世間的価値観をもつ姫君の、価値には絶対的判断基準はないとする主張が、『宇治拾遺物語』の盗跖や、世捨て人である『徒然草』の作者兼好に共通するものであることも、「虫めづる姫君」の作者が、『宇治拾遺物語』の編者や兼好のような、精神の自由を重んじる骨太な男性の作者だったからではないかと思う。

## おわりに

作品を読むということは——特にこのような短編においては、どこか一部を取り上げて論じるのではなく、細部の読み解きが全体のトータルな読み解きに繋がることに心を配るべきであろう。つまり、何度も出てくる姫君の主張のすべて、その言動のすべて、そして右馬の佐の印象のすべて、それらが有機的に結びついてストーリーの構築や人物造型がなされている、ということを看過してはならない。

本稿は細部と全体の読み解きによって、従来は把握されなかった姫君の一貫した主張や言動——それは、「物

の本質を見る、本質とは変化する事象である」というところを押さえた。そして、それが右馬の佐の、「美しいのに惜しい、でもなぜか気高くてあなどれない」というアンビバレントな印象に秘められた、ほんとうは、美しいのに惜しい、ではなく、「通念から自立しているがゆえに気高くてあなどれない」と解するべきととらえた。自らの価値観と精神の自由をもって振舞う姫君の、凡俗ならぬ生き生きした命の輝きを認めるものである。しかし、それでも「女は人に見られてはいけない」という当時の習俗の堅固な習俗から抜け出すことはできず、それを含め、女に課せられた制約ゆえに、「女は鬼と同類だ」と見なさねばならないところに、女であることへの痛恨がある。それは作者の読者への挑戦的な問いかけではないだろうか。変わり者の姫君という素材を、作品の面白さとしてのみ受け止めているだけでは、作品の真意を見逃すことになるのではないかと思う。

## 注

- 1) 『王朝物語のしぐさとことば』清文堂、2008年。
- 2) 三一書房、1971年。後、筑摩書房（ちくま文庫）、1988年。